

「G.V. Black の分類」か？*

中 原 泉**

窩洞は、歯科保存学の基本である。その窩洞の分類には現在、いわゆる「Black の分類」が広く用いられている。保存学の成書には、Black's Classification として、次のように記載されている。

「下記は、Dr. G.V. Black によって唱えられた窩洞の分類である。」¹⁾

「窩洞の分類のための別の方法は、約 100 年前に Dr. G.V. Black によって設計されたものである。」²⁾

「G.V. Black は技術的特性に基づいて、5つの組に窩洞を分類した。」³⁾

「G.V. Black は歯面における齲蝕発生の頻度を基盤として、窩洞を5種に分類した。」⁴⁾

いずれもこの解説のあとに、窩洞の分類を列記している。なぜか、Black が記述した分類の文章表現を、そのまま襲用・直訳した成書は見当らない。しかし、表現手法は異なるものの、いずれもその趣意内容は変わらない。

ところが、これら日米の解説には、史實的にみて明らかに誤謬があることを指摘せざるをえない。語弊があれば、正確さを欠くと言いなおしてもよい。ここで筆者が拘泥するのは、文中の“G.V. Black によって……”，“G.V. Black は……”という個所である。

Green Vardiman Black は1908年、72歳のとき、それまでの研究の集大成として、『A Work on Operative Dentistry』2巻を出版した⁵⁾。そのⅡ巻の Excavation of Cavities by Classes の章で、の

ちに Black's Classification と呼ばれる窩洞の分類法を定式化した。つぎの11行（原文で）である。

Class 1. Cavities beginning in structural defects in the teeth, pits and fissures.

Class 2. Cavities in the proximal surfaces of the bicuspid and molars.

Class 3. Cavities in the proximal surfaces of the incisors and cuspids which do not involve the removal and restoration of the incisal angle.

Class 4. Cavities in the proximal surfaces of the incisors which do require the removal and restoration of the incisal angle.

Class 5. Cavities in the gingival third —not pit cavities— of the labial, buccal or lingual surfaces of the teeth.

同著はその後、1955年までの半世紀に、9版まで増刷もしくは改訂された。そこで、各版における分類のセンテンスを辿っていくと、同分類の史的な経緯が判明する。

まず、1922年に発行された第5版では、同文は（原文で）12行に記述されている⁶⁾。

Class 1. Cavities beginning in structural defects in the teeth, pits and fissures.

Class 2. Cavities in the proximal surfaces of the bicuspid and molars.

Class 3. Cavities in the proximal surfaces of the incisors and cuspids which do not involve the removal and restoration of the incisal angle.

Class 4. Cavities in the proximal surfaces of the incisors and cuspids which do require the removal and restoration of the incisal angle.

Class 5. Cavities in the gingival third —not pit

* G.V. Black's classification ?

** Sen Nakahara: The Nippon Dental University School of Dentistry at Niigata
日本歯科大学新潟歯学部

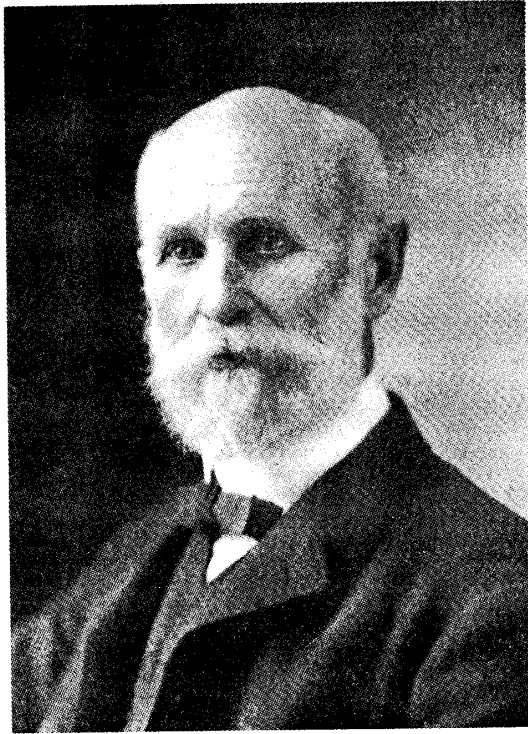


図 1. Green V. Black



図 2. Arthur D. Black

cavities—of the labial, buccal or lingual surfaces of the teeth.

すなわち、4 級のなかに「and cuspids …と犬歯」という語句が、加筆されている事実を見出すことができる（下線の部分）。

言うまでもなく、4 級窩洞は切端隅角の除去と修復の必要性を条件とする隣接面のタイプであるから、その除去と修復を必要としない 3 級窩洞と対称する項目である。3 級の項には、「the incisors and cuspids 切歯と犬歯」と明記されていることからみて、これは初版における単純な脱字であると思われる。4 版まではそのミスに気づかず、5 版になってようやく追加訂正したのではなかろうか。

つぎに、第 7 版（1936 年発行）に刮目した⁷⁾。章のタイトルが Classification of Cavities into Artificial Groups と改まり、全文が 18 行（原文）にふえていた。

Class 1. Cavities beginning in structural defects in the teeth; pits and fissures. These are located in the occlusal surfaces of the bicuspid and molars, in the occlusal two-thirds of the buccal surfaces

of the molars, in the lingual surfaces of the upper incisors, and occasionally in the lingual surfaces of the upper molars.

Class 2. Cavities in the proximal surfaces of the bicuspid and molars.

Class 3. Cavities in the proximal surfaces of the incisors and cuspids which do not involve the removal and restoration of the incisal angle.

Class 4. Cavities in the proximal surfaces of the incisors and cuspids which do require the removal and restoration of the incisal angle.

Class 5. Cavities in the gingival third—not pit cavities— of the labial, buccal or lingual surfaces of the teeth.

Classes 2, 3, 4 and 5 are all smooth-surface cavities. They all occur in positions in which the surfaces of the teeth are habitually unclean.

各級の原文には一切手を触れていないが、つぎの 2 カ所の加筆がある。

1 級窩洞の項のあとに、「それらは、小臼歯と大臼歯の咬合面、大臼歯の頬（側）面の咬合面 2/3、上顎切歯の舌（側）面、および時には上顎

大臼歯の舌（側）面に存在している。」また、分類の末尾に「2, 3, 4 と 5 級は、すべて平滑面窩洞である。すべて歯の平滑面の位置に生じるそれらの窩洞は、常に不潔である。」と補足されている（下線の部分）。

前者は歯の構造的凹窩に起始する 1 級窩洞の小窩裂溝の位置、後者は 2 ～ 5 級の特性について、おのおの解説を加えている。

つまり、初版で提唱された分類法が、第 7 版において完成されたと言ってよいだろう。後世の識者が襲用しているのは、この第 7 版分類法なのである（第 8・9 版も全く同文）。これを以って、G.V. Black による分類と称しているのだ。ここに、史実の錯誤がある。

というのは、G.V. Black は 1915 年に 79 歳で没しているのだ。それは、第 2 版を増刷した翌年に当たる。当然、第 3 版からは彼の意思は及んでいない。当初から彼の仕事を助けてきた子息の Arthur D. Black が、同著の改訂と出版を引き継いだのだ（彼は、父のあとを継いでノースウェスタン大学歯学部 of Operative Dentistry の教授となり、加えて父の死後、同歯学部長をもつとめた。）

つまり第 3 版以降、G.V.B. は同著の原著者、A.D.B. はその遺著の改訂者となったのである。

A.D.B. は永らく、保存学のバイブルといえる名著を、最少限、補訂するにとどめた。第 7 版に至って、改訂者として自らの名前を掲げ、書題を「G.V. Black's Work on Operative Dentistry」と改め、大幅な改訂を行なった。

その際、A.D.B. は窩洞の分類法に先の補足説明を加えて、その内容を補完したのである。すなわち、斯界に普遍した窩洞の分類法は、同学の父子の麗わしい共同作業が生んだ合作であったのだ。息子とはいえ、Black の不巧の定義に筆を入れるには、相当の勇気を要したであろう。それは実に、初版から数えて 28 年後のことであった。

因みに、同じく提唱者名を冠した「Angle の分類」を対照してみよう。歯科矯正学の成書には、つぎのように記されている⁸⁾。

「アングルはその著書の最終版である第 7 版（筆

者注：1907 年発行の『Treatment of Malocclusion on the Teeth』）で、その分類法を次のように記載している。（分類は略）

アングルが 1889 年に発表した初期の分類法によると、定義に加えて、第 I 級不正咬合には不正咬合は“一般に前歯に限局されている”。第 II 級第 1 類不正咬合には“狭窄した上顎歯列弓、鼻唇機能の欠如”。第 II 級第 2 類不正咬合には“軽度の上顎歯列弓狭窄、上顎前歯の叢生と舌側傾斜、正常な鼻唇機能”。第 III 級不正咬合には“下顎前歯、犬歯は舌側傾斜を伴う”などという解説が付されている。

第 7 版にしるされた分類法は、これらを除いてさらに簡略化したものである。形態学的な分類法の中に呼吸法の異常という原因論的な定義を付記した点が、アングル分類の一つの欠点であると指摘されているが、初期の分類ではむしろ口腔周囲筋の機能や行動についての関心が払われていたことは注目してよいことである。（後略）

このように最終期から初期に至るまで遡行し、まことに詳細な史的考察を試み、不正咬合に関する Angle の理念とシステムに徹底した分析を加えている。こうした考証の確かさは、偉大な先覚の知恵を究めたい、という執拗な学問的欲求に根ざしている。そこには、先人に対する深い敬意がある。

ともかく、われわれは学問的史実に忠実であらねばならない。こうした一見瑣末（さまつ）にみえる考証を通して、先人の仕事を正確に評価することは、後人のつとめの一つである。

偉人 G.V.B. の背後にあって、とかく影の薄かった A.D.B., G.V.B. の遺志を継いで、『Operative Dentistry』の充実に力を尽した A.D.B.. われわれは、彼の功績をなおざりにしてはならないのだ。

そうした意味において、いわゆる「G.V. Black の分類」は、“G.V. Black と A.D. Black による合作”であることから、『Black 父子の分類』と呼称するよう、ここに提言する。

（本論文の要旨は、昭和 61 年度第 14 回日本歯科医学学会学術大会で発表した。）

文 献

- 1) H.W. Gilmore 他 : Operative Dentistry (Ⅲ ed.), The C.V. Mosby Co., セントルイス, 1977.
- 2) L. Baum 他 : Textbook of Operative Dentistry (Ⅱ ed.), W.B. Saunders Co., フィラデルフィア他, 1985.
- 3) 総山孝雄 : 保存修復 (充填) 学総論・窩洞形成法 (7 刷), 永末書店, 1973.
- 4) 渡辺富士夫, 井上時雄 : 保存修復学 (1 版), 医歯薬出版, 1980.
- 5) G.V. Black: A Work on Operative Dentistry (I ed.), Medico-Dental Publishing Co., シカゴ, 1908.
- 6) G.V. Black: A Work on Operative Dentistry (V ed.), Medico-Dental Publishing Co., シカゴ他, 1922.
- 7) A.D. Black: G.V. Black's Work on Operative Dentistry (Ⅶ ed.), Medico-Dental Publishing Co., シカゴ他, 1936.
- 8) 本橋康助, 岩沢忠正 : 歯科矯正学 (1 版), 医歯薬出版, 1974.